

私の学生時代

薬学部
薬学科

准教授 大橋 敦子



大学入試の共通一次試験(今のセンター試験)が新しく始まった年に北海道大学に入学しました(「選択肢から選ぶ共通一次試験で育った学生は自分の頭で考えない」とよく言われたものです)。兵庫から憧れの北海道にやってきました。大学生活が始まると、何でも楽しくて楽しくて、瞬間に過ぎて行きました。志望の獣医学部に進級し、馬や牛の解剖に度肝を抜かれたり、生化学、生理学、薬理学、微生物学など講義や実習に追われながら、友達と助け合い多くの試験を乗り越えました。



薬理学教室のスキー旅行です。修士論文を提出した直後なので、みんな嬉しそう。ストックで遊んでいる伊藤先生(左から4人目)。私は左から2人目。

その獣医学部でも新しく「大学院修士課程を利用した6年間の獣医学教育」が始まったばかりでした(今は大学6年制の学部です)。全員が修士に進学し、それまでと同じレベルの修士論文をまとめるという方針により、2年間じっくりと大学院生の日々を満喫できました。朝から晩まで研究室にいて、研究に夢中の先生や先輩や友達に囲まれて、実験したり論文を読んだり討論して過ごしました。研究室でスキー旅行に行ったり(左下写真)、他の教室とチームを作って運動会に参加したり(右上写真)、遊びも力いっぱいやりました。その日々の中で、指導の先生や先輩に助けを借りながら、実験がうまくいった時の楽しさや、論文をまとめる面白さを自分で感じ取ることができたのです。この経験のおかげで、その後も素晴らしい研究者の先生方に出会う幸運を得て、自分の興味や進路が変わっていきました。

12月の修士論文の発表会が終わると、3月の



獣医学部の運動会です。大賀先生(前列左)と中里先生(前列右)も参戦して下さいました。私は左から2人目です。

国家試験に向けて勉強が始まりました。専門以外の科目は2年以上のブランクがあります。まだ国試対策本もなく、研究室ごとに専門科目の対策ノートを作成して1冊にまとめました。間に合わないと感じながらも本気で勉強すると、何が大事か見えてきますし、効率の良い勉強の仕方もわかってきます。国家試験を乗り越えた経験は、職業の資格という意味だけでなく根底から自分を支えてくれます。薬学部は6年制が完成したばかりの手

探り状態の上、薬剤師国家試験は毎年新しい薬が増えるので大変ですが、薬学生の宿命と覚悟を決めて頑張らしよう。

私の学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は大橋准教授と志渡教授のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

私が学生だった頃

看護福祉学部
臨床福祉学科

教授 志渡 晃一



私にとって、自らの過去を振り返って、なぜこの道を選んできたのかについて明確な意味づけをすることは困難である。現在に至るまでの一貫した信念や行動を披露しようとしても後付けの感が否めない。しかし、せっかくの機会を与えられたのだから学生諸君に反面教師としての私の履歴をお聞かせすることとしたい。なお、本稿には大学時代の写真を数枚添えることになっているが、火災(もらい火です)のため消失している。残念ながら若き日の姿をお目にかけられることはできない。お許し願いたい。

1歳8か月にポリオに罹り「右下肢に著しい機能障害」を負ったため、小学校2学年から卒業まで札幌市内の真駒内養護学校に通学した。その後、普通の中学に進学し、高校入学の頃から漠然と大学院に行きたいという思いが芽生えていたように思う。そのため大学進学には何の躊躇いもなかった。「社の都での学園生活を…」というパンフ

レットに惹かれて、1979年4月に仙台市にある東北福祉大学社会福祉学部社会教育学科に入学した。札幌の親元から離れて一人暮らしがしたい。大都会は苦手だかといって田舎にも魅力を感じない。またあまり暑いところは嫌である…といったしょうもない理由から進学を選択した(ただし、養護学校時代の担任の太田清先生に対する尊敬と憧れから、教員免許を取得したいという真面目な思いが確かに選択理由のひとつにあったことは事実である)。

大学へは片道40分かけて毎日徒歩で通った。寺社の境内などを通り抜ける道行には季節感があり決して苦行ではなかった。当時の体重が50キロ台でぜい肉が無く、高校時代に卓球部で鍛えた体力があったためなのだと思う(卒後35年、今では体重が10キロ以上増えて立派なメタボ体型となっている)。アパートの部屋には四季を通して電気炬燵があるだけで、扇風機、冷蔵庫もなくテレビも電話もなかった。コンビニはなく、買い物は坂を500メートルほど下った(午後7時過ぎには閉店する)商店街に向くしかなかった。休日の昼過ぎからずっと本を読んでいて、文字が見えづら

思ったらもう日が暮れていたことに気づくこともあった。数日の休みの間、誰とも話をしないことも少なかつた。一人なのだと実感した。とりわけ誰もいない部屋に帰って電球に灯をつける瞬間が寂しかった。

さて、大学の講義で印象に残っているのが、「法学」の講義である。担当教授はドイツ帰りの法学博士の渡辺信英先生である。いつも武者小路の友情などの文学の話ばかりをされていた。その中で、ロビンソンクルーソーを題材とした「自由の内部的制約」が強烈に心に残っている。「他者の自由を侵害しない範囲で自己の自由が認められる」ということだったと思う。卒業ゼミではインド哲学専攻の文学博士である杉本卓洲先生に師事した。恩師からは「冷たい頭と温かい胸」という言葉を頂いた。さらに「その人の人格を超えた教育はできない」という言葉とともに大学院進学に向けて背中を押して下さった。不肖なりともこの言葉を折に触れ反芻している。我が北海道医療大学に当てはめると「その人の人格を超えた医療・保健・福祉などの対人サービスはあり得ない」ということになろうか。学生諸君の健闘をおおいに期待している。